編集後記

今年度はハイブリッド形式の授業ということで，演習の大半はオンラインで行った。昨年度すでにオンラインのみで実施していたこともあり，教員側は比較的戸惑いは少なかった。演習を経験したことのなかった学生にとってどうだったかについては想像するほかない。いずれの形式にしてもそれぞれの苦労があったことには違いないだろう。無事に演習の成果をまとめる運びとなったこと，関係各位に深くお礼申し上げる。

特定の年度に限った話ではないのだが，データと解釈，実際に行っていることと考察の対応関係をはっきりと意識しながら報告をまとめることは難しいようである。慣れない統計量の報告やその書式に注意が傾くあまりか，特定の条件間の平均値が有意に異なると報告しながら，どの条件の間に違いがあったのかを執筆者が明確に捉えられていないことがある。さらに，それらの違いが冒頭で設定した仮説や予測，その背景にある大きな理論や問題意識とどのように結びついているのかが自覚されていないこともある。

また，考察において男女の参加者で違いがあったのではないか，疲労によるパフォーマンスの低下が起こっていたのではないかと指摘していながら，男女別に見た場合の再分析や実験の前半と後半でのパフォーマンスの比較がなされていないことがある。そのように指摘するのであれば，さっそく手元のデータで検証してみれば，指摘の内容が実証的に裏づけられるかどうかを確認できる。事前に計画され，統制されたものでなくとも，こうした事後的分析は傍証となりえるだろう。何より，自らの思考をデータによって実証的に検証するということの訓練になる。

心理学の実験・調査レポートは，節立てから文体，果てはフォントに至るまで多岐にわたる約束ごとに満ち満ちている。勢い，教育者も学習者も形式面に注力しがちなのであるが，実証研究のスタイルを身につけるという本質を見失わないようにしたい。

2022 年 3 月 21 日

大正大学心理社会学部人間科学科
井関 龍太
r_iseki@mail.tais.ac.jp